

第19回定期委員会開催

日刊

動労千葉

1988.12.13

No. 2940

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五（六）（公衆）〇四七二（二二）七二〇七

命と安全を守るために 安全運転闘争を貫徹しよう

十二月十日、動労千葉は、千葉県労働者福祉センターにおいて八〇名を結集し、第十九回定期委員会を開催した。

東中野駅事故を厳粛に受けとめ、安全運転闘争に総決起しよう！

委員会は、赤羽根昭男委員（館山）を議長に選出、冒頭あいさつにたった中野委員長は、

①「東中野駅事故を痛苦の念をもって捕らえなくてはならない。この事故はまさに起こるべくして起きたものであり、全責任はJR当局にある。また、鉄道労連・松崎明も同罪である。」

②「動労千葉は『国鉄を第二の日航にするな』を合言葉に、分割・民営化に反対し二波のスト・数波の順法闘争を二八名の解雇と大量処分を出しながらもたたかった。十万人の合理化がいかに無謀なことであつたか。安全無視なのかについて指摘しながらたたかってきた。十二・五事故は『たたかわなければ殺される』ことを悲劇的に証明した。十二・五事故を契機に『自分たちと乗客の生命は自分たちのたかいで守る』という運転保安の精神に立ちきり、安全運転闘争に全力で決起していかなくてはならない。」

③「今年に入ってから大変な割合で重大事故が発生している。最近では東北線、そして上越線脱線・衝突・転覆事故と、かつて国鉄時代には考えられなかったようなことが原因の事故が多発している。特に、上越線事故については列車指令が『列車が脱線しているかもしれないが、注意しながら行ってこい』と、疑いたくなるような指令をだしている。このような中で発生したのが十二・五事故である。三河島・鶴見事故以来の重大事故である。しかも、十二月一日に殺人的過密ダイヤが強制されてからわずか五日目に

して発生した。国鉄時代には『もう総武線の増発とスピードアップは無理』と当局すらも公然と自認していたのである。それを、JRに移行してから『一分短縮すれば大変な宣伝効果』などと称して利益をすべてに優先させるといふ営利主義に徹し、安全を切り捨ててきた結果、このような重大事故が発生したのである。乗務員が一分、三十秒でも遅れば乗務停止処分を乱発し、ATSの取り扱いについても統一した指導訓練がなされず、一企業一組合路線のなかでベテランの運転士・検査係が職場から追い出される。鉄道労連革マルと結託した合理化強行、強権的労務支配が重大事故を発生させてしまったのである。二人の死を無駄にしてはならない。安全運転闘争として、一、見込み運転はしない二、回復運転はしない三、速度制限を厳守する。の三大方針を全組合員は貫徹しよう。」

④「十二・一七労戦統一反対！労働者集会に全力で取り組もう。」

⑤「冬季物販運動を貫徹しよう。」と訴えた。
この後、布施書記長、水野・山口両副委員長から「十二・一ダイヤ改を中心とした経過」「十二・五事故弾劾！反合・運転保安確立を中心とした運動方針案」「財政・共済」「交渉」の提起がなされ、討論に入っていた。

運転保安問題に討議沸騰！

討論では、青年部、貨物支部、電車支部、乗務員分科、検修分科から、運転保安問題、事故弾劾を中心に、昇進・昇格問題、職場抵抗闘争などいきいきとした発言がなされ、満場一致で本部分針を採択した。また、十二・五事故の当該支部の浜野支部長をはじめ四人の委員から「反合・運転保安確立を目指し、総力決起する決議」「委員会宣言」が提案され、圧倒的な拍手で確認された。

動労千葉の原点は「船舶事故」闘争以来の「反合理化・運転保安確立」のたたかいである。十二・五事故を真剣に受けとめ、「船舶事故」を契機にたちあがっていった時を全組合員が想い起こし、原点から始めよう！自らと乗客の生命は自ら守る！安全運転闘争を貫徹しよう！

右翼労戦「統一」に反対する

12.17 労働集会に集ろう

千葉第19回定期

